

慈眼寺たより

第8号
平成22年7月
春日井市下市場町
「慈眼寺」
電話 81-6801
編集 伊藤秀文

私の過去帳

四ツ谷 田中錠一

一春日井市居住地としての始まり

昭和二十六年、愛知県土木部職員として、勤務地春日井市上条町の愛知県直営砂利採取所勤務となり、片道約十五kmを毎日自転車通勤、その頃はほとんどが砂利道であった。勤務した事務所は、庄内川の砂利を機械船で採取して、県内の各土木事務所トラックと国鉄の貨車で配送して、県道の補修用に供給していた。

当時、上条町から春日井駅まで引込み線が敷設されていた。その後、道路もアスファルト舗装に移行されていき、事務所も昭和三十四年度を持って閉鎖、三十五年度から県庁勤務となった。昭和三十三年に土地を取

得して現住所に家を建て、昭和三十四年八月三十日に西春日井郡から春日井市に引越した。

当年九月二十六日の伊勢湾台風により、新築の家も半壊の被害を受け、修復に三ヶ月ほどかった。

二 慈眼寺とのつき合い

昭和三十五年長男を亡くし、わが家の先祖の御守りとして、五十年間慈眼寺様にお世話になりました。平成二十一年十一月に五十回忌も終り、今後は夫婦とも健康に注意し努力してまいります。

嫁に出した二人の娘と五人の孫との出会いを楽しみにしております。

(実家は現北名古屋師勝町)

《青柳歌壇・俳壇》

菜の花と 桜は並ぶ

はいポーズ

空蝉の シュプレヒコール

夜座の風

伊藤清雄

ありがとう 支えてくれた五十年

庭梅咲くを待たず妻逝く

揺れる松 凍てつく岩に根を張りて

寒風に耐え 春の陽を待つ

今井正

仏壇へ 供ふ竹の子

茹で上げて

ほつれん草 甘い甘いと

母喰らう

貴美子

畦刈りに 田嶋必死で

雛庇う

秀一

あれやこれ 思いめぐらす

花筏

夕やみに クチナシの花

うかび出る

久幸

お盆のお知らせ

棚経の日程

八月十二日 浅山、鳥居松

勝川、名古屋方面

八月十三日 四谷、南部

熊野、神領方面

八月十四日 下市場 穴橋 掘北

八月十五日 穴橋、関田、上条

高蔵寺、坂下方面

右は原則です。

別途個別にお知らせします。

お施餓鬼

お施餓鬼は、毎年八月十八日で今年の水曜日になります。七月一日から受付をしております。早い時間帯は、予約済みになっております。ご希望の方はなるべく早めにお申し込みください。電話で結構です。

お布施は今までどおりで

初盆施餓鬼 五万円

特別大施餓鬼 三万円

大施餓鬼 二万円

合同施餓鬼 一万円 です。

精霊流し

八月十五日の午後四時半から慈眼寺の山門で、檀方総代の方をお願いして集めてもらっております。まとめて供養のうえ処分しております。明るいうちにお持ちください。

女房と名医と利益

檀方総代 大野悟

約十年前、慈眼寺の建設当時、大草の福蔵寺の住職に、落慶・晋山式のお願いとご挨拶に、慈眼寺住職と伺ったとき、雑談で「般若心経もよめない者が大役を勤められるだろうか」というようなことを言いましたら、「お寺の建築などの骨折りをしておけば、必ずご利益がありますよ」と言われたことがありました。なんと本当になったのです。

平成十九年十月、物忘れが多くなったと娘に言われた女房殿が、近くの脳神経外科で脳のMRIを撮ってもらったところ、脳の血管に大きな動脈瘤が見つかりました。さあ大変ということで、いろいろ皆さんに相談したところ、藤田保健衛生大学病院にとても良い先生がいらっしゃる。ことが分かったのですが、紹介状が必要とのこと。その後インターネットで佐野公俊先生を調べ上げ、面識のないおのくりニックで紹介状を作ってもらいました。最初に行った日は学会出席とかで空振

り、二度目に出かけた日は、九時から三時まで待たされてやっと診察、その後CT検査などで夕方までかかり、一月後の診断では「あまりに難しい場所です。手術はムリ、様子を見ましよう」ということで、三ヶ月に一回診察と検査で二年がたちました。この間、動脈瘤も一センチから二センチと成長してきます。三年目に入った今年の一月の夜に、佐野先生から電話があり、大至急手術をしないと破裂をするかもしれないから明日診察に来なさいとのこと。

翌日、診察の結果、検査入院を二月の初め、手術を二月十八日にすることになった。佐野先生の話では「この手術は、私が今まで多くの手術をしてきたうちでも、非常に困難である。成功すれば、一番記憶に残るものになります」と言われましてとても心配になりました。

検査は三日間で、まず脳への血流をどれくらい止めることが出来るかを調べました。動脈瘤が膨らんだままでは手術できないからです。首の血管に小さな風船を入れて血流を十五

分間止めて脳への影響や、体力の限界を調べました。前日には入院して説明を受けました。死ぬ確率が三分の一、言語障害や半身不随、失明などが三分の一、成功が三分の一だそうです。麻酔、切開から縫合まで五人の専門医が、必ず成功させるように協力して努力しますと励まされ、また手術も佐野、加藤という二人の教授が力を合わせてくれるということでした。「テレビ局から撮影したいという問い合わせがあったが出てみないか」と先生からの相談がありました。これは自信があるのだなという感触を持ちました。

テレビの撮影は、日常生活での朝の散歩、寺社参り、食事洗濯などとは手術の実況です。手術は、皮膚を額の中ほどから左耳の上まで、弧を描くように切り、頭蓋骨に子供の拳ほどの穴を開け、硬膜、くも膜を切開して大脳と小脳の間より、左眼球上部の骨を割って、その奥にある視神経と平行した血管の動脈瘤に、純チタン製の四個のクリップをかけるものです。

風船の根本に洗濯ばさみをかけて空気が抜けないようにするのと同じようなものです。終るまでに八時間半かかりました。説明によると、破裂寸前であつたが成功したとのこと。このクリップの寿命は三〇年ということ。同じ。

この方法は佐野先生が開発し、旭川や千葉の有名な脳外科の先生に指導されたとのこと。ギネスブックに載るほどの三千回以上も手術をこなし、世界的な権威者であるにもかかわらず、威張らず自慢せず穏やかで、しかも後進の指導にも厳しく熱心で、まさに名医とはこれぞと思いました。テレビの映像でも、弟子である加藤教授を立てておられました。先生も六四歳になられ、今後は東京を起点に世界中にクリップ治療の指導と、新しい治療法である網スリーブの研究が続けられるそうです。

こんな名医に巡り合えたことは、まさしくご利益であつたと思っております。今後、も精進して参りたいと思っています。

修証義について

住職 春日井浩道

年忌法事などで、皆さんと一緒に誦むお経に「般若心経」と「修証義」というのがあります。般若心経は、仏教のエッセンスのようなお経で「空(くう)」を知ること、悟りの中核するもので、浄土教以外のすべての仏教宗派で読まれています。もうひとつの「修証義」は曹洞宗独特のもので、正式には「洞上在家修証義」といい、曹洞宗の開祖である道元禅師の「正法眼蔵」という大著を、分かりやすくというところで、明治になってから編纂されたものです。中心となったのは、大内青巒(せいらん)という仙台出身の人で、この人は後に東洋大学という学校の学長になりました。

報恩(ぎょうじほうおん)」と名付けられています。

第一章・総序は、お経全体の前書きのようなもので、仏教徒としての心構えのようなことが説かれます。すなわち、生死の問題を明らかにして、確たる信念を持つこと、それが仏教徒の一番大事なことで、それがいつてもあります。誤解を恐れずに言ってしまうと、生死、つまりは生きるかどうかということが、を究明し確信すればそれが悟り、即ち仏の境地に達するということです。こういう悟りにいたる努力が修行というものです。こういう努力を課せられる点で、仏教はほかの宗教と際立つた違いが出てきます。

それはともかくとして、人生は短いのであるから、寸暇を惜しんで努力しなさいといっています。悟りについては誰も助けてくれないよ、自分の努力しかないのだよと。

第二章・懺悔滅罪は、仏の道に入るためには、まず今までの、間違ったやり方などを全部明らかにして、始めからやり直せといっています。間違っていたかどうかは本人では分かりませんから、「前仏に懺悔すべし」といっていますが、要は客観的な基準に倣えということでしょう。もっと砕いて云えば、

独りよがりの持論に固執するなということでしょう。ここで「悪」という言葉が使われていますが、むしろ、クリアな視点を妨げる要素のことを言っているのだと思います。

第三章・受戒入位。さていよいよ、仏教徒としての守るべき基準を叩き込まれます。戒めを受けて、仏の仲間入りをするという意味でしょう。最初は皈依三宝といって、仏法僧を敬えといっています。仏は先覚者、法は真理、僧は修行仲間のことです。そうは言っても、仏も法も抽象的なもので、具体的にはどうしようもない。せいぜい謙虚に、修行仲間の僧と信頼関係を作るといえるでしょうか。そのほかに三つの淨戒、十の重禁戒などが定められています。人間の集団には、やはりそれなりのルールが必要なのでしょう。

第四章・発願利生。ここでは、仏道修行の核心について説かれます。大乘仏教では、修行は自分のためだけでなく他者のためにという姿勢を重視します。その実践の内容は、布施、愛語、利行、同事の四種類。布施とは僧侶に対する金銭の支払いの意味に使われていますが、元来は物を人にあげること、あるいは寄付することを云います。愛語というのは優しい言葉

をかけること、利行とは他者のためになる行為、同事というのは、協力すること。これらは世の中を円滑にする、きわめて当然のことでありますが、それだけ実践するのは難しいのかもしれない。こういうことを不断に実践することが、菩薩の道だというわけです。

第五章・行事報恩。最後は、めくくりの章。報恩の心を持つて生きよと説かれます。一人の人間、ひとつの生き物は、それ単独で生きられるものは、最も原始的な植物を除いて、ありません。いろんな生き物の絡み合いの中で生かされているのです。また、こうして人間として生かされており、仏の教えを聞くことができるということとは、考えてみればこの上ないラッキーな巡り合わせだということです。だから、このチャンスが無駄にすることなく、修行に励みましょう。そうすれば、お釈迦様が到達されたと同じ境地に達せられるのです。

以上が、私なりに解釈した「修証義」の意味ですが、「修」とは修行のこと、「証」とは悟りのこと、「修証義」とは「修行と悟りについて」というような意味です。さて、その悟りの内容については一言も出てきませんが、修行そのものが悟りだとされているのでしょうか。

達磨石

曹洞宗は、道元様によって宋から日本に伝えられました。その元になるのは、菩提達磨様によってインドから中国に伝えられた禅宗です。

達磨様は六世紀、インドから海路中国に入り、梁という国に滞在した後、洛陽の近くの、拳法で有名な少林寺というお寺で、ずっと壁に向かって座禅の修行をされたということです。その姿が、いわゆるダルマさんで、赤い衣をまとって手足を引っ込めて座禅している様子を表したものです。

ところで、この写真は達磨さんの座禅姿に見えませんか。



これは土岐石という碧玉の一種で、東濃から庄内川（土岐川）流域地方で見つかります。緑がかった硬い石で、元は木の化石

だといわれています。

その魅惑的な色彩に愛好家も多く、庄内川の河川敷や、宅地造成など工事現場で見つかることもあります。幻といわれるほど貴重な石ですので、皆さんも心に留めておいて、見つけてください。思わぬ宝物にめぐり合うかも知れません。

田嶋

田嶋えのすんだ田んぼの中には、いろんな鳥が来ています。蛙やおたまじゃくし、或いは水草などを食べているのです。う。



これは田嶋という鳥です。鳩より少し大きいくらいで、脚と嘴が長く、敏捷に飛びます。蛙や虫を食べているようです。田んぼの畦に卵を産んで子育てをします。人が近づくと威嚇します（写真は北城の水田）。

写真市長賞

「小牧山さくらまつり」という催しの写真コンクールで、伊藤清雄さんが最高の市長賞を獲得されました。「春のすき間」という題で、一四三点の中から見事栄冠を得られました。おめでとうございます。



中日新聞（5月14日）より

編集後記

今年は春から天候不順で、何時までも寒さが続いていたと思ったら、梅雨に入ってまた異常な蒸し暑さになってきました。慈眼寺たよりも何とか八号を送ることになりましたが、編集作業はなかなか苦労しております。皆様の貴重な体験やお話などをお寄せいただければと思います。お寺と関係のないお話でも結構です。ぜひとも皆さんにお知らせしたいような

出来事がありましたら、編集委員が檀方総代或いはお寺までお寄せください。

お見舞い
申し上げます

檀方総代	
伊藤辰男	伊藤秀文
伊藤正廣	伊藤正
大野和義	大野悟
木村広孝	春日井浩道
住職	

「慈眼寺たより」というからには、少しはそれらしくということ、今回は修証義について考えてみました。禅宗というのは「修行が悟りである」というようなところがあって、とても分かりにくい教義のようです。むしろ教義などはない「不立文字」ということでしょうか。道元様の一番弟子であった懷奘（永平寺二世）という人でも悩んだということです。まあ仕方ないかも知れません。

「慈眼寺たより」 第八号
平成二二年七月十五日 発行
ホームページ

<http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/>